

経済学

外部不経済について、市場メカニズムでは効率的な資源配分が達成できないことを図を用いて説明し、ピグー税およびコースの定理についても述べよ。

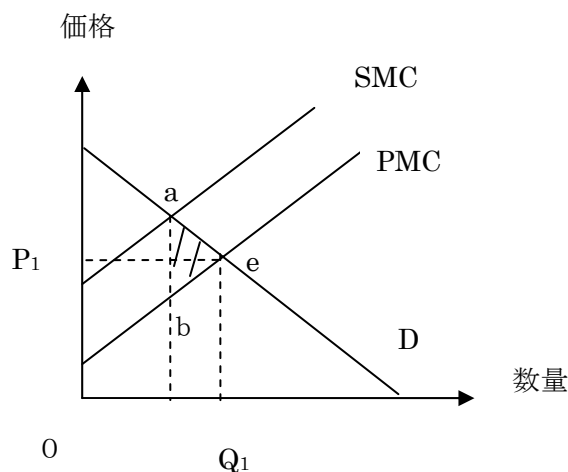
解答例

外部不経済とは、市場メカニズムに反映されないコストが市場に存在する場合に発生し、市場メカニズムを通じては最適な資源配分とならないことが知られている。

外部不経済の典型例としては、公害があげられるが、公害を出しているにも関わらず、企業が公害による社会的な損失を何も負担しないとすると、かかる財を供給する企業の限界費用曲線と、社会全体の限界費用曲線は異なることになる。

次の図は、そうした外部性の発生する場合の市場を示したものであり、図中の PMC は企業の私的な限界費用曲線を示し、 SMC は社会全体の限界費用曲線を示している。また、 D は需要曲線である。 PMC には、外部に対するコストは含まれておらず、 SMC には含まれているので上方に位置することになる。

このとき、市場メカニズムに任せておくと、 PMC と D の交点である e 点で均衡してしまうことになる。このとき、真のコストを反映した限界費用は SMC であり、最適な資源配分をもたらす均衡は図の a 点であるため、次の図の斜線部分（三角形 abe ）のデッド・ウェイト・ロスが発生することとなる。



以上のように、外部性のある場合には、企業の供給曲線が正しく費用を反映していないため市場メカニズムを通じて最適な資源配分となる均衡をもたらすことはできない。したがって、政府による介入により最適な資源配分をもたらすことのできるケースがある。

その一例がピグー課税である。

先ほども見たように、この市場で望ましい均衡点は図の a 点であった。したがって、この市場における均衡点が a 点で実現するようにすればよい。具体的には ab だけの従量税を課すことにより PMC が図の a 点を通るようにすればよいのである。こうしたピグー税を課す

ことにより最適な資源配分を達成することができる。

また、こうした外部性を是正する手段として他にはコースの定理というものが知られている。これは、交渉コストがかかれば、外部性の出し手と受け手のどちらがその費用を負担したとしても、最適な資源配分が達成できるとするものである。

以上